

## 植民地統治の象徴

コンゴ川のほとりにナベンバタワー (La tour Nabemba) がある。1986年にフランス系のコンゴ石油会社であったエルフ・コンゴ (Elf Congo) によって建てられたもので、首都ブラザヴィルの発展の象徴的な建造物だった。30階ある塔の高さは106mで、コンゴで最も高い。当時、コンゴに在住していた私もこの新しい塔を見上げて、何だか誇らしげに思えたことを覚えている。やがて、90年代の内戦で塔の外部や内部も損害を受け、窓ガラスは割れ、壁も傷み、無残な姿になった。しかしその後、政府によって改修工事が進められ、1990年にはナベンバタワーとして復活した。現在は政府の機関や民間のオフィスが入っている。



ナベンバタワー

おおよそ大きな街にはその「象徴」となるような建造物がある。そのなかでも、東京タワーや通天閣、スカイツリーなど、タワー（塔）が象徴的存在となることが多い。世界的に最も有名なものが、パリのエッフェル塔ではないだろうか。この塔は1889年のパリ万博の目玉的存在だった。建築者のギュスターヴ・エッフェル (Gustave Eiffel) にその名が由来するが、当時はパリにそぐわない鉄のタワーとして評判が悪かったようだ。しかし、現在は年間700万人の訪問者数を誇る世界でも有数の観光スポットとなっている。

エッフェル塔がデビューしたパリ万博で、同じく人気を博した企画の一つが、「人間動物園」なるものだった。この博覧会の前に開催されたパリ万博 (1878年) では「黒人村」(village nègre) というパビリオンが設置されているが、それと合わせると2,000万人を超える来訪者があったという。主要な「展示品」は、アフリカなどフランスの植民地から連れてきた先住民だった。囲いのなかで生活する彼らの姿が展示品となり、囲いの外からそれを眺めるというもので、まさに人が「檻」に入れられた動物を見るのと同じ構造である。先住民の多くは、裸か半裸状態で展示されていたようである。

最初の万国博覧会は、1851年にロンドンで開催された。当時、ヨーロッパは産業革命を成し遂げ、大量生産の時代を迎えようとしていた。それに伴いアフリカに向けられるまなざしは、それまでの奴隷という労働力の獲得地から産業を支える原材料の供給地へと変化し、そのなかでアフリカ大陸は「再発見」されようとしていた。アフリカには多くの探検家や宣教師が送り込まれ、川の水源地や湖、山など地理的な発見だけではなく、人種や言語、風俗、習慣など、ヨーロッパ人にとってさまざまな発見がもたらされていた。そうした風潮のなか、アフリカ人たちの生活や体格も好奇的となった。アフリカの現地住民をさまざまな尺度で調査分類することは、植民地統治を行う上で必要不可欠だったという背景もある。肌の色や顔形、言語などの相違によって分断されていったのである。

なかでも、かつて「ホッテントット」と呼ばれていたコイサン

族の女性サラ・バートマンは、象徴的な存在であろう。20歳のときイギリスに連れてこられた彼女は「ホッテントット・ヴィーナス」と称され、その臀部が大きいという身体的特徴によって注目を浴び、見世物とされた。彼女が亡くなってからも医学的関心から遺体は解剖され、さまざまな人体実験がなされたようである。

アフリカ人をこうした好奇の目でみる時代的背景に、「社会進化論」が関係していると言われている。アフリカは植民地開発されるなかで、「未開」とされた。当時ヨーロッパ社会で受け入れられたダーウィンの進化論と相まって、アフリカ人は進化の過程において人類の初期段階的な存在と見なされ、アフリカ社会、とくに黒人社会は「遅れた」社会とされ、進化の頂点にあるのがヨーロッパ社会だという考え方は広く共有されていた。このような時代背景のなかで、植民地におけるさまざまな民族の風俗や習慣、肌の色といった肉体的特徴などをヨーロッパ社会や白人と比較し、その違いを浮き彫りにするための一つの「装置」として、この「人間動物園」が機能したと言われている。それはまた、19世紀のヨーロッパの帝国主義や植民地統治の正当性を保証する象徴的なイベントでもあった。

さらにまた、19世紀は「鉄の世紀」とも言われている。イギリスでは鉄鋼協会が創設 (1869年) され、ヨーロッパで鉄鋼研究が盛んになっていく時代である。パリのエッフェル塔は植民地開発によってもたらされた利益に支えられ、ヨーロッパの次なる産業の発展を象徴するものであったのかもしれない。

塔が世の中の発展や繁栄のシンボルとして「見上げる」存在であるなら、同じ植民地統治の象徴でもあった「人間動物園」は、「繁栄」し「進化」した側から、アフリカ人や黒人、もっと拡大するなら白人社会以外を「見下ろす」ことによってその優位性を裏付ける存在であったのかもしれない。

そのエッフェル塔からセーヌ川沿いに少し東に行つたところにケ・ブランリ博物館がある。2006年に開館し、アフリカをはじめアジアやオセアニア、南北アメリカに関するものが展示されている。収蔵品の数は30万点にも及び、なかでもサハラ・アフリカ地域の美術品が7万点以上ある。展示されている作品、所蔵されている品々の約9割は1937年に、国際博覧会の催事として設立されたパリの人類学博物館から来たものだ。そしてその人類博物館こそ、前出の「ホッテントット・ヴィーナス」の遺体が1974年まで保管されていた場所でもある。



ケ・ブランリ博物館から見上げるエッフェル塔

現在、ナベンバタワーはオフィスビルなので観光客は入れない。しかし、もし観光資源として活用するならば、塔からのコンゴ川の眺望はきっと観光スポットの目玉になるだろう。少し残念な気がするが、この「人間動物園」の歴史を知ると、「他者から見下ろされたくない」というメッセージとも受け取れる気がしてくる。